あと

4

2010

横浜・フランス領事官邸址

大千　　保多孝三著『柞廬印存』(七) より

大千　仏教の世界観による広大無辺の世界。須弥山を中心に日・月・四大州・六欲天・梵天などを含む世界を一世界として、これが千集まったものを小千世界、それが千集まったものを中千世界、さらにそれが千集まつたものを大千世界といい、これらを総括していふ。三千世界。

あわ雪の中に立ちたる三千大千世界又其の中にあわ雪ぞ降る　　良寛

三千世界しょいあるく貸本屋　　古川柳

大千は今でいふ〝宇宙〟のことのやうに見える。無窮のマクロ・ミクロの世界。

作品は一辺 4 ㎝ほどの歪んだ矩形。言葉の大きさに負けぬゆつたりとした風格がある作品である。

あと

四　　月

平成

雪の富士マグマが透けて見えてゐる
平成を餘分とおもふ似非柳葉魚
紀元節グレートデンと道分つ
こりこりと顎よろこぶ島鹿尾菜
唐突に人裏返る春の草

本町三　佐藤喜孝

面接官の声穏やかやビル風
履歴書を送り返され二月かな
熟年は武器とはならず藪柑子
年金の切抜を読む炬燵かな
如月や郵便受に年金便

白金　斉藤裕子

親しめり心波打つ日の冬芽
春の雪ひもじき鳩の歩きをり
箸づかひ下手なるままに蕨餅
肩紐は頼りなきもの春動く
春きざす八百屋の旦那役者顔

京橋　篠田純子

もうそこにきのふはなくて福寿草
一枚を脱いでは着ては木の芽風
斑雪池の緋鯉の透けて見ゆ
団子坂古りし石垣犬ふぐり
梅林に金柑の実の大樹かな

千駄木　芝尚子

金縷梅の花

青梅街道早咲きいでしまんさくは
金縷梅に行き交ふ人のふりむかず
日和雨赤い長靴下萌に
青梅街道行き来の光まんさくに
夫の忌のその日のやうに雪ふれり

宝仙寺前　芝宮須磨子

江天一色

火事消えて天の星々よみがへる
雪竿のたうとう見えずなりたるよ
着ぶくれて江天なまりいろ一色
植木鉢伏せて穴あり日脚伸ぶ
下見板繕はんなど建国日

剱地東出（つるぎちひだしで）　定梶じよう

浅春

富士仰ぐ沼津アルプス落椿
乗り継いで梅見の人となりにけり
観梅や人多けれど閑かなり
梅日和水琴窟の音幽か
辛淑玉（しんすご）や樹々には重し春の雪

所沢　須賀敏子

年年と小声になりし豆を撒く
白梅に頬打つ風の痛きかな
境内の梅の綻び猫走る
留守電に話す空しさ外は雪
房総の潮風かかる蓬摘

本町三丁目　鈴木多枝子

昼の火事

下校時のばらばら走る昼の火事
元日閉館返却口に本落す
おもひだしたやうに賀状の着く吉日
聖餐のごと一椀の風邪の粥
細引に括りし枯枝芽吹きそむ

浦和　竹内弘子

誕生日

左手の甲の冷たき誕生日
白い器に立春の湯を満たしをり
春の塵吽像の臍大いなる
涅槃図へをぐらき堂の奥曲る
桜餅見え透く嘘を笑ひけり

田端　田中藤穂

早朝の湯気と豆腐と春の雪
節分や懐紙の外に豆こぼれ
三寒や提灯括られ震へをり
手に熱し春筍の煮物椀
「わあ雪だ」「また雪か」の春の朝

三光坂　東亜未

二月

四温晴白い上下の青年走る
四温晴鉢植え抱へ満たされて
白と青太く鮮か葱を焼く
草芽吹境界五ミリ地下陣地
フィギュア踏むステップのごとし二月

富田　長崎桂子

いぬふぐりはるか昔の陣屋跡
友の弾くパイプオルガン復活祭
耕耘機夕日に染まる家路かな
春愁や駅のホームに長き貨車
春の雪しばし墨絵の世界なり

大宮　早崎泰江

雪

秋山郷何処かに潜む雪女
凍瀧の水も時間も止まりたる
雪原にジャンプの少女宙に舞ふ
雪原に響く歓声銀メダル
梢よりさっと消えゆく春の雪

中井　森山のりこ

春の雪

春の雪今日の主役の我微熱
裸木や酸素マスクに管数本
寒き春麻酔に眠る手に触るる
乳呑児に大泣きさるる桃の花
春の雪なにかしらある冷蔵庫

落合　森　理和

春の夜しづかに時間きざみゆく
手袋のときどき行方知れずなる
弟の邪険にされる大試験
少年の笑顔まぶしく桜咲く
日の透けて白梅淡い黄になれり

本町三　吉成美代子

猫

霜柱踏みて早早猫の恋
御来光あふぐ鴉と恋猫と
恋猫に指鉄砲をむけてみる
恋猫に枕とられて夜を明かし
野良猫に平らにあたる春日差

鍋屋横丁　吉弘恭子

冬季五輪

幕開ける冬の祭典華々し
着ぶくれて朝晩同じテレビ見る
金色のスケート選手銀メダル
重きもの背負ひて競ふ冬の陣
大地震の画面に変り二月尽

清瀬　赤座典子

初雪や雪かきに燃ゆ夫のゐる
雪の上みかんとりんご早目白
梅の花やたら刈り込みぽつぽつと
木の芽風猫も涙とくしゃみして
冴返る音もなく出る水っ洟

聖蹟桜ケ丘　安部里子

一対の雛だけ残り今一人
釣釜や妻がゐてその母が居て
ヒマラヤン恋猫となり生臭し
春光や豆腐の角の固さうに
又会へぬ別れもありし春の雪

曳舟　遠藤実

逗子　鎌倉喜久恵

強東風を迎へ打つ気で外出す
寒梅の香りになぜか狼狽す
どっちみち極楽遠し日向ぼこ
店先に春火鉢出す峠茶屋
雛まつる戰火に消えし雛想ひ

川崎・小田栄　木村茂登子

春の川たゆたうてゐる曲り角
双雲の書展を出るや春一番
雪を聴く反骨封じてより久し
三ッ星の二郎の店の春灯
味噌汁に散らすに一つ蕗の薹

一人一句

酒くさい錦鯉くる冬の梅　佐藤喜孝

松の内一番静かなる二日　木村茂登子

初夢にちちははも居り嬉しげに　斉藤裕子

建ちかけのスカイツリーの淑気かな　篠田純子

小正月帯に折りぐせ結び癖　芝　尚子

輪の外で幸せたしかむお正月　芝宮須磨子

ピン札が一枚混じる注連買ひに　定梶じょう

冬晴や愛宕神社に三角点　須賀敏子

段畑の海に迫り出す水仙花　鈴木多枝子

母に似し姉のもの言ひ青木の実　竹内弘子

凛として今日を暮さむ冬木の芽　田中藤穂

鶏旦や古家に嬉し墨の勢　東亜未

前月作品

直球の鈴鹿颪に畫雨戸　長崎桂子

裸木となりて落着く欅大樹　早崎泰江

白梅がたっぷり空っぽの町に　堀内一郎

紅梅の蔭より少女いでさうな　森山のりこ

寒雀飛び立つ浜の松ぼくり　森　理和

水仙の一センチ伸び青き空　山荘慶子

大旦生傷ひとつつくりしも　吉弘恭子

蹲踞の水浴ぶ対の冬の鳥　赤座典子

おいおいと呼ぶはどなたか去年今年　安部里子

梅一樹鉄の蓋ある路地に咲き　遠藤　実

不二の山白にて四方をことほげり　鎌倉喜久恵

喜孝抄

三月作品より

吉弘恭子

江戸地図のうへを歩いて日脚伸ぶ　佐藤喜孝

いまではなかなか一般の家には無い江戸の地図。何れかでみる機会があったのであろう。作者が興味を持たれたのはどこいら辺りであろうか。現在住まわれている中野に近い内藤新宿あたりであろうか。青梅街道中野村あたりかも知れない。こんな事を思っていると人それぞれに興味があるところは違うことがよく分かる。さしずめ私などは、父が若かりし頃吉原の大門の交番に暫くいたことを聞いていたのでその場所を最初に探したかも知れない。吉原の盛んだった頃と時代が違ってずいぶんと変わってしまっていると思うが。昼の時間が伸びてきたといってもまだ冬。時間のたつのは早いもの、地図の上を目で歩いただけでも至福の時間が過ごせて良かったことと思う。江戸時代小説が好きな私には羨ましい刻だったように思う。

凧一ツ二ツ三ツ欲し初御空　木村茂登子

昔はお正月には兄や姉に見習って凧揚げをやったように思う。誰かしらが紐の重心をなおしてくれたりしながら近所の子供達が集まっていたものだ。何時の頃からかお正月になっても外で遊ぶ子の姿が見られなくなってしまった。子供の頃過ごした福島県の三春や、新潟市の東堀でも今では同じように居ないのであろうか。淋しい気もするが時代にあった遊びがあるのだから致し方ないが、町のそこらここらで笑い声が聞こえるようにと思っている。ましてや元日の空には凧が賑やかに舞って欲しい、三つと言わずいくつでも。

否応もなく正月の来てゐたり　芝　尚子

毎日身辺の雑事に追われて過ごしている私は、

一日が過ぎるのはあっという間だ。「あを」最高齢の尚子さんにとって過ごされた時間は、日本にとって色々なことがあって厭な事だったり嬉しかったこと等が頭の中に山積みされているはずだ。現在は一日一日を充実して過ごしていらっしゃられると、もっと一日が長かったらと思われることでしょう。その積み重ねで一年は夢の如くに過ぎる。又元日を迎えることになる。充分満足な一年を過ごした証拠である。

母に似し姉のもの言ひ青木の実　　竹内弘子

お姉さんの物言いはどのような言い方であろうか。いつも言われることに「親にそっくり」「親に似ず」と正反対の言葉がある。どちらも良いときと悪いときがある。この句の季語は青木の実、冬になると春と違い花の気配が無くなっている時期で実の色の赤は美しい。葉の陰から赤い実がちらりと見えるのは寒い時期にほっとする色だ。この句の場合季語はいろいろ考えられるが、青木の実をもってこられたのは寒い時期にあたたかい気持になられたのだと思った。何でも言ってくれる姉妹って、年をとっても良いものですね。弘子さんもお母様似のところが

身の奥の奥より湧いて母似の咳

のように句にも詠まれている。少しでも親に似たところを指摘されると、子供の頃とても嬉しかった事がこの句に出合って甦ってきた。

懐炉貼る身の軽く動く楽しさ　　長崎桂子

昔金属ケースに入れてある紙に巻いた灰に火を付けて身体に巻き付けていた祖母を思いだした。体温の高い私は、懐炉を貼ることがないが、寒いところに出掛けるときはとても便利のようだ。今は裏の紙を剥がして貼るとすぐ使えるという便利なものになった。体が固くなった寒い時期は特にいいようだ。身が軽くなった楽しさ、うれしさが目の前で見ているようで気持ちのいい句になった。

白梅がたっぷり空っぽの町に　　堀内一郎

過疎化の進んでいる町が其処此処にあるようだ。この句の空っぽの町はそのようなどこかの町かも知れない。作者の住んでおられる新宿でもそのような所があるのであろうか。「たっぷり」「空っぽ」の二つの言葉の効果で白梅の満ちあふれるほどの咲くようすと、人通りもなくなってしまった町と様子をそれぞれ思んぱかることが出来て情緒の深い句となった。淋しいのは嫌いなので、なるべく人が大勢居るところにいたいと思っている。

喰ひぶくれ鏡の中の三が日　　鎌倉喜久恵

乗り物の運転手さんやサービス業などの方々はお正月もなく働いていらっしゃられるが、そのほかの方は三が日の内は一応働くのはお休み、主婦もそのためにお節料理がある。商人だった我が家は、何時の頃か大晦日は仕事が終わってからすき焼きの夕食、お節料理と言っても、煮物・酢のもの・田作・きんとん等手作りのものは会社が休みの私の仕事になっていた。あとは蒲鉾など買ったものです。やっぱり仕事もなくごろごろしているとどこでカロリーの消費をするのかと心配するところだ。私もご多分にもれず休み明け会社に行くときは洋服が心配であった。鏡は尚のことである。私と違って喜久恵さんは嬉しかったのでは。

紅梅の蔭より少女いでさうな　　森山のりこ

梅が蕾の時や咲きはじめは少しあかみがかっている。咲いてみるといつの間にか白一色になっている。

桜とくらべると華やかさは少しばかり劣るが、楚々とした感じがまたいいものだ。

この句は紅梅と言っている。薄いピンク色の華やぎとの感覚が木の影から可愛い少女が出てくるという感覚が若々しい。少女が現れた時の感動が伝わってくる。

近世俳諧と漢詩文 2 参拾

王岩

鳥散余花落
かきつばた魚や過けん葉の動き　　几董

几董は寛保元年（一七四一）～寛政元年（一七八九）で、高井氏である。別号に晋明・春夜楼・高子舎などがある。蕪村の高弟で、夜半亭三世を継いだ。自選句集『井華集』がある。

問題の句は『几董句稿』に載っており、句前の詩句は『文選』に載る六朝時代の斉の詩人謝眺の五言古詩「遊東田（東田に遊ぶ）」から取ったのである。

……

魚戯新荷動、　魚の戯れて　新しき荷は動き
鳥散余花落。　鳥の散びて　余れる花は落つ
不対芳春酒、　芳春の酒に対わずして
還望青山郭。　還って青山の郭を望む

東田は、鐘山の東にあった謝眺の別荘で、詩はその別荘に遊んだ時に詠まれた。池の魚は楽しげに泳ぎ、そのたびに若い蓮の葉が揺れ、鳥が木から飛び立つと、残花が落ちてゆく。

几董は「鳥散余花落」を句題に取ったのみでなく、その前句「魚戯新荷動」の一齣をも句中に生かした。「新荷」を「杜若」に置き換えて、池の魚が遊泳するたびに杜若の葉は動き揺れる様子を描いた。謝眺の詩は春の風景を詠ったが、几董は夏季の風物を詠んでいる。

高井几董

鶯の隣へ逃てはつねかな
鶯の二度来る日あり来ぬ日がち
うぐひすや小太刀佩たる身のひねり
狼藉を従者ことはるや垣の梅
梅寒し奴にくるゝ小盃
梅の窓に三線ひくや毛唐人
行水や春のこゝろの置所
むらさきに夜は明かゝる春の海
落かゝる日に怖気だつ汐干哉
鯛を切鈍きはものや桃の宿
植木屋の花うれぬ間に盛かな
打とけて我にちる也夕ざくら
来たか来い見ずに置てもちる花ぞ
百花咲てかなしび起るゆふべ哉
花過てよし野出る日やわすれ霜
長き日の脊中に暑しおそ桜
遅き日やひとへからげる草履道
長日を羽織着ながら寐たりけり
門口に風呂たく春のとまり哉
関札やどなたのとまり春夕
僕ガ妻の絹着て帰る春のくれ
山吹や胡粉の見ゆる雨の後
菫踏で石垣のぼる恋路かな
五加木垣都の客を覗きけり
家ぬしの摘にわせたるうこぎ哉
青海苔や石の窪みのわすれ汐
藤咲て田中の松も見られけり
白藤や猶さかのぼる淵の鮎
月よりは上ゆくものかほとゝぎす
ほとゝぎす路通はもとの乞食哉
短夜や空とわかるゝ海の色
今少しなれぬを鮓の富貴哉
明いそぐ夜のうつくしや竹の月
たれこめて祭見る家や薫す
等閑に杜若咲く古江かな
五月雨の猶も降べき小雨かな

初心の頃

と

自選十句

亡き人をときどき忘る草の餅

火宅僧バケツの諸子のぞきをり

紫陽花をぐらりと挿せる土瓶かな

初春や荒事なれど玉三郎

白墨を投げし教師を恋へり夏

蝿叩見えぬところに掛けてある

回廊さむし木版の叩き減り

みしみしと通りすぎたる夏の蝶

太宰忌や蕎麦湯のにほひむっとして

洋梨（ラ・フランス）しばらく香らせておきぬ

竹内弘子

大宮市の（後にさいたま市となる）建売住宅に引越したのは昭和47年で、下の娘が四歳でした。翌年ちかくの幼稚園に入り、一緒に通園する男の子の保護者Sさんが送り迎えの道々、集会所で俳句の会があり、おなかまのご子息が『暖流』という俳句結社の同人で、月に一度教えに来て下さるとのことでした。

読書会の経験はありましたが、人前で俳句を作って発表するなど、同好の士、いわゆる趣味人のやることだと思っていたものです。

集会所の句会に始めて出席したの恰度イギリスのエリザベス女王が来日した頃です。

「外つ国の女王の帽子風薫る　弘子」

幼稚園から帰った子は、細々した玩具、絵本やクレヨンを手提げ袋に詰めて、句会の間中あそんでいました。高島茂氏の「ボルガ」句会や直に瀧春一主宰の聲咳に接することの出来る「谷中句会」も楽しかった。『暖流』終刊後「獐」を経て「あを」の代表になった佐藤喜孝氏は、『暖流』の大先輩です。

満作や男の髭の不可解な

春立つやこまめにつける化粧水

手話の輪に静かな笑みの風光る

石五つ飛んで渡って春の川

一膳の炊き立てご飯春の雨

妖怪のここには棲めぬ麦畑

十六夜や染屋にかかる鮫小紋

寝転んで少し近づく星月夜

虎落笛関東平野の送電線

冬の海煮干し工場の跡広し

森　理和

初めての吟行

もう、二十年位前になるでしょうか、厚木基地とフェンス一枚が隔てる広大な土地に、亡き村田静枝さんの会社で産業廃棄物処理場の休日に事務所をお借りしての吟行会。

公道からすぐに豚舎や菜園がありました。次には、ビルの地下二階程も掘り下げ「ハウルの動く城」のような焼却炉が、休日も機関車音と煙と湯気とを立てていました。その又先に二階建ての事務所がありましたが、マッチ箱のように小さく見えました。

ジェット機の爆音の中蠅生まる　　恭子

高い評価を受けました。ジェット機と蠅の対比に目から鱗の一句でした。廃棄場の為にある一跨ぎほどの溝、私には溝川以外には何も浮かばなかったあの流れが「夏の川」、俳人の観察眼の柔軟さにも驚かされました。

ちなみに

廃棄場太きホースで打水す　　和子

高島茂・本橋仁の両先生に選句を受けました。記憶ばかりを頼りに記述いたしました。

あを柳集

兼題　光

佐藤喜孝　選

光は今年の歌会始めのお題でもある。昭和三十五年のお題も「光」であった。

皇太子殿下お歌

昼ふかき光降りしく楢林落葉の上は日のはだれなり

皇太子妃殿下お歌

光たらふ春を心に持ちてよりいのちふふめる土になじみ来

五十年後の今年は

天皇陛下

木漏れ日の光を受けて落ち葉敷く小道の真中草青みたり

皇后陛下

君とゆく道の果たての遠白（とほしろ）く夕暮れてなほ光あるらし

入選歌では左記の句に惹かれた。

焼きつくす光の記憶の消ゆる日のあれよとおもひあるなと思ふ

久保田幸枝

我が面は光に向きてゐるらしき近づきて息子(こ)はシャッターを押す　　森脇　洲子

俳句では

石古りし月の光もしむやうに　　夏目成美
ぜんまいののの字ばかりの寂光土　　川端茅舎
ひらひらと月光降りぬ貝割菜　　川端茅舎
月光にぶつかつて行く山路かな　　渡辺水巴
月光は凍りて宙に停れる　　山口誓子
風立ちて月光の坂ひらひらす　　大野林火
蝶になる途中九億九光年　　橋　閒石
光詰めし電車過ぎゆく無月かな　　高島　茂

など魅力的な句がある。このやうな俳句に伍する作品を「あを柳集」から送り出したいと願つてゐる。

どこからか月光洩れて菜が漬かる

どこからかもれ差す月光のお陰で菜が上手に漬かつたといふのだが理屈に合はないが、詩の

修辞としては成りたつ。が、おもしろがってゐると足下をすくはれる時がある。漬物樽が置かれてゐる納戸のやうな小屋かも知れない。羽目板から差し込む月光も町中とは比較にならないほど多量に降り注いでゐる。売物の漬物とはひと味違ふ出来上がりである。月光のありがたみが分かる。郷土愛を感じた。

冬耕の土くろぐろと光満つ

耕した土が枯草色の中でくろぐろとしてゐる。そこらには遍く冬の光が満ちてゐる。土そのものに命の充実感を覚える作者。易しい言葉で、やさしく表現してゐる。そこから滋味が溢れてゐる。これは『暖流』の瀧春一先生の教へを体現してゐる。春耕と冬耕を何度も入れ替へて読んだ。そして「冬耕」を良しと思った。

早春の光に五感よみがへる　　鎌倉喜久恵

階段の手すり冷たく光りをり

とび立てば光を散らす春の鴨

夜天光夜鳴き鴉のつづく方（かた）　吉弘　恭子

おぼろ夜の光芒地球の端をゆく

春暁や光明丹をつかひきる

みどり児の光りか黒目五月風

稲光まともに家へ入りこむ

「光聚庵」御大師さんの初茶会　木村茂登子

読始め辞典光電効果の項　定梶じょう

どこからか月光洩れて菜が漬かる

押入や春光こんな処まで

一帆が行くとき陸の風光る

たんぽぽの絮の光輪夕さるる

燈台の光芒の上雁渡る

竹林の光と影に春の風　早崎　泰江

冬星の頑張りなよと光りけり　鈴木多枝子

春の海船はしろじろ光りけり

寒星のひとつ光りて懐胎す　篠田　純子

モンローウオーク白梅の発光す

百千鳥沼津アルプス光る湾　須賀　敏子

牡蠣の殻あをく光れる神楽坂　竹内　弘子

水光りをる末黒野のひとところ

水鳥のつがひ光の直中に

きんかんの一粒づつに雪光る　東　亜　未

春光や隣家の少女に五年振り

寒垢離の裸身光をはじきけり　田中　藤穂

坐禅堂光と闇のほのぬくむ

光撒くごとく降りきし寒雀

冬耕の土くろぐろと光満つ
光より来て水鉢に春の鳥
戸の隙間光差す大和八州誕生
春の川嵩増し光さんざめく
目覚めは朝光とせりヒヤシンス
うきうきと光の中を紋黄蝶
頭の中に光もれくる櫻の夜
よく光る子規庵の窓小鳥來る
ガリ版は月の光を刻む音
光飛ぶものへ打ち振るいぬふぐり
雪消光いつぱい貯めて夜の鏡
光芒に頭と尻尾花のあと
春の草光を返す力あり

長崎　桂子
森　理和
佐藤　喜孝

二月の句会

傳　中野区　カフェ傳

紅梅に寄りて二つの車椅子　敦寒林子
一本の除雪の道は駅に果つ　恭子
日の差して薄氷ゑみしごとく揺れ　綾子
ふらここや少女に恐きもののなく　茂登子
温飯に落して光る寒卵　喜孝
唐突に人裏返る春の草　裕子
面接官の声穏やかやビル颪　純子
箸づかひ悪きまま老い蕨餅　美代子
手袋のときどき行方知れずになる　喜久恵
夜烏の屋根蹴る音や寒に入る　典子
春眠にハッピーエンドの余韻あり　弘子
大根おろしの水分老年期長し　泰江
薄氷甕の水草動き出す　藤穂
生きてゐるしるし春灯玄関に　理和
風邪に臥す二日の赤き実の消ゆる　実
登るほど海の広がる梅の園　敏子
春の雪いつもの山を被ひたる

調（つきのみや）　岸町公民館

一月
海鳴りの轟く高志（こし）の雪囲ひ　敦子
老しづか七草粥の椀二つ　慶子
蒸鮓や戦後物なき日を姑と　藤穂子
カーテンの奥に人をり寒雀　綾子
古暦うらをかへして手習ひす　弘子
梅の花杖にリズムのありにけり　綾子
拝復にそへる一行クロッカス　泰江
薄氷のそよ風よりもやはらかし　敦子
快復期らしきメールの着く余寒　弘子

二月

あを吟行会　池上本門寺

梅ヶ香に身を委ねたるひと日かな　恭子
山門の甍まぶしく昼の月　美代子
入寂の居室より見ゆ枝垂梅　弘子
早春の大堂の内こんじきに　尚子
福寿草はなびらこぞり日を返す　喜孝
紅梅のはなびらとどめ苔の石　綾子
乗り継いで梅見の人となりにけり　敏子
踏めば凹む黒き土あり梅の園　喜久恵
座論梅対の蕾の行儀良く　典子

七座（ほくと）句会　中野区・小川苑

平成を余分とおもふ目刺かな　喜孝
春雪に釘をこぼしてそのままに　寒林
恋猫に指鉄砲をむけてみる　恭子
もうそこにくのふはなくて福寿草　尚子
おほっぴらに泣いて明るし涅槃絵図　綾子
年々と小声になりし豆を撒く　多枝子
春の雨音なき音にひとりをり　房代
早朝の湯気と豆腐と春の雪　東亜未
涅槃図へをぐらき堂の奥曲る　藤穂
乳呑児に大泣きさるる鬼の豆　理和
夫の忌やその日のやうに雪ふれり　須磨子
囀って十万億土までゆくか　木枯

連句勉強会　毎月第2日曜
希望者は左記まで
(090-9828-4244)

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

あとがき

森理和さんの「初めての吟行」を読んで記憶力のない私にもいくらかの思ひ出が蘇つてきた。あの会社名は「神環保」で「シンカンポ」と読んだらしい。ネットで調べるとダイオキシンが規制値の六十六倍排出してゐたと知つた。あの中に一歩足を踏み入れた時、名画「モナリザ」の背景のやうだつた。村田静枝さんは中野にも縁がある。なんでも中野駅北口の公衆便所あたりの地所は村田さんの所有だつたと聞いてゐる。思ひ出したついでに拙句も思ひ出してみた。

大焼却炉神話のやうに火は流る
廿世紀の怪鳥の嘴なに啄む
産廃処理場彩濃き小川うねり抜け
軍機発着横いち列に梅雨鴉
巨大焼却炉帚使つて浄めをり
ねずみ取二つ干しあり処理場に
巨大ボイラー日の丸軍機飛来する

あれは一九九三年六月のことであった。

吟行案内

場所　千駄ヶ谷の富士塚（都指定有形民俗文化財）
集合日時　五月十五日（土）十一時「千駄ヶ谷」駅（徒歩四分）

寛政元年築造。都内では最も古く頂上近くは富士山の自然石が使われている。八幡神社境内にある。
参加希望者は五月十一日まで　幹事・佐藤喜孝

二〇一〇年四月号
発行日　四月十日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電話　090-9828-4244
佐藤喜孝
竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。